

■ 公開講演会

たましいのゆくえ

—日本人の死に方と生き方の道—



「The Future of the Soul :
Japanese Ways of Living and Dying」

2003年10月20日(月)
午後6時30分～8時30分
南山大学D棟

カール・ベッカー
(京都大学教授)

司会：

いろいろな皆様の顔ぶれを拝見致しますと、今回は皆様がさまざまな案内でいらしたかただと思います。けれども、人間関係研究センターではこのように毎年カタログをちょうど今頃、11月頃、来年のためにという形で準備をしております。大学というところはいつも学年歴が前の年の秋にプランニングされますが、人間関係センターの役目を御紹介しますと1年架けながら今年はこの先生にいらしていただきたい、この時代の人間関係のテーマはこういうところで問題が起こっているのではないだろうか、あるいは社会の関心はここにあるのではないだろうかという、時代、あるいは時代意識をお持ちの皆様一人ひとりの気持ちにアンテナを張り巡らせながら、地域活動といえますか、ちょっと行政用語的になりますが、地域に根差した大学の人間関係のあり方というのを探っているセンターです。

毎年、あるいは毎日のようにこの会場がセンターの講座という形で、いろいろなカウンセリングの講座や、あるいは人間関係が実際にこの場で展開されていくような、体験学習というような教室の場になっております。

皆様にとって、大学教育や地域に根差した社会教育というのが何なのか、あるいは皆様が実際に今なさっているいろいろな関心の事柄が、実はこの地域を作っていく大事な教育風土になっています。皆様方にこのようにおいでいただけるということが、この場所自体が質的に高まり、人間関係によっていろいろな日本の大学が高められていくという思いで、このような公開の講座を秋と春に開いております。

本日お招きしたのは、京都からおいでいただきました方ですけれども、友情出演のようにお招きしております、日本の文化を十分に心得た友人としてお招

きましたカール・ベッカー先生を今、お待たせしております。

講演のテーマは、「たましいのゆくえ」です。私たちの人間関係というものについて、今までは社会的にうまくいく人間関係、社会的な関わりというレベルで位置付けられたり、あるいは仕事がかまくいくようにという労働経営的な会社の組織という、そういうレベルで人間関係という学び方をしていく場面がだいぶ増えてまいりました。本日の講演は特に一個人における体の健康、心の健康、そして精神的・社会的人間関係としての健康、そして魂の健康について、それを現代的には死とか生という、そういうことを切り口にしながら本日は、人間の見方として魂という視点でお話をいただきたいと思います。

だいぶお待たせしておりますけれども、ここにお集まりの方は南山大学では宗教文化研究所の先生方、それから哲学科、教育学科の先生方という立場のいろいろな顔ぶれでありますし、地域活動的には死に関するケアをしていらっしゃるカウンセラーの方々や、アソシエーションとして健康のWHOアソシエーション、ホリスティック医学協会のアソシエーション、それから看護師さん、南山大学の学生の方たち、西洋医学にもがきを感じているお医者様方などの顔ぶれがございます。

どうぞひとときですけれども、皆様の英知をここに残しながらお話を伺うことができたらと思います。

では、カール・ベッカー先生、よろしく願いいたします。

ベッカー：

このような方々を前にして、私が一方通行にお話しさせていただくよりは、それぞれの宗教家・医療家、また自分の家族などを介護したり、あるいは子どもを教えたりしているそれぞれの方々から学びたいという気持ちの方が話したいという気持ちよりは大きくて、皆様の前で私が話すというのは些か滑稽というか、「釈迦に説法」的な側面がなきにしもあらずです。「たましいのゆくえ」というテーマを与えられて、何もこれはあの世の話ではありません。確かに私はこの数十年にわたって、ハワイ人や日本人の末期患者を相手にして、あるいはその遺族などとの話の中で、魂はどうなっているのかということをしていろいろと考えさせられました。また、強いて言うならば、私がずっと日本におりますのも、アメリカや、あるいは西洋の魂の考え方より日本の魂の考え方の方が、何となく私の気性に合っているような気がするからでもあります。

そういう意味で、「死と生き方」は私がずっと抱えてきた一つのテーマではありますが、魂というときに、何も遠いあの世の存在でもなければ、決して抽象的な問題でもないのです。一人ひとりが魂を持っているというよりも、魂であると私は考えてしまいます。それは、何も体の細胞の集りである肉体が魂とは限らず、「一寸の虫にも五分の魂」と言われる理由も、細胞よりは自分の記憶が大事だからです。記憶しているのは頭脳だけではありません。自分の体の記憶もあります。自分が一番大事にしている希望・夢・価値観、さらにはあつては

ならないと断じて許さぬ信念も含めて、自分たらしめているものが自分の魂だと思えば、魂の行方は早い話、我々の行方です。人間として、また、日本として。

そして、今日はこの数十分を有効に利用するために、便宜上覚えやすい仕組みをとってみたいと思います。

「生老病死」をキーワードにして、まず生、生きる場所の魂の行方を考え、そして老と病を一くくりにしてまとめます。つまり生きることがうまくいかないとき、何かの病にかかったり、あるいは老いのためにもう走れなくなったりするようなことも共通性を持っていますので、その老と病についてのことを考え、最終的に死までまとめてみたいと思います。

日本の近未来の危機

日本は、下手をすると世界が経験したこともないような、死の王国になりかねない状態にあります。これまでのバブルを含めて、我々がこのことを忘れる錯覚さえ覚えているかもしれませんが、戦国時代から明治期までは、日本はずっと2,600万前後の人口を支えてきました。言い換えれば、有機農法、そして維持可能な農業法で、また段々畑で山のあらゆるところまで耕してその人口を支えてきました。この列島が最大に生かせる人口は大体2,600万前後です。年によって2,700～2,800万に増加した徳川時代があれば、即座にその増加が飢饉・飢餓などにつながり、また、そうならないように常時、間引き等を行い、人口を意図的に支えた文化でもありました。そうでもしなければ生きられなかったわけです。ところが現在、我々の人口はどうなっているかというと、これは1900年代のことですが、大正時代から徳川時代の人口の倍ぐらいになって、大変切羽詰まった時期になったわけです。それで、やむを得ず日本は満州やら台湾やら、人口がまだ日本ほど高くない他のところを植民地にして、そこから石炭・石油などを輸入しようとし、同時に、人口を輸出しようとしたわけです。それ以外に方法はなかったのです。

ところが、それが戦争によって実現できなく、戦後どうなったかというと、世界で見たこともないような人口爆発がここ日本で起こっています。現に1億3,000万前後の人口が現在も減りません。子どもを産む比率は減りつつありますが、老人が長生きするために、この1億3,000万の人口がこれから10年、十数年続く見込みであります。

ところが、日本国内で支え得る人口は変わらず2,600万以下です。もう段々畑をつくり山まで耕せなくなりました。電線も水道もないところで我々は住めないのです。日本の農業の産物が激減していますし、差し当たって今、中国・隣国などから輸入はしているものの、どんどん日本の隣国が、食物輸出国から食物輸入国に変わりつつあります。

だから、8年前にお米が足りなかったときに、タイからおいしくないと言われたインディカ米を大量輸入し、カレーをかけたりにして食べる工夫をしました。ですが今年、不作になったときには、その案すら生じなかったのです。

なぜなら、タイはもう食物輸出国でなくなっているからです。そこで、古米をどう食べるかという話になったのです。

あまり悲劇的な状況だけを見たくないのですが、我々は島国に住んでいます。その島の限界と現状を、まず5分から10分ぐらい掛けて確認させていただきたいと思います。

失業率のことですが、日本は長年にわたってこれほどの失業率はなかったのに、この2000年をはじめとして3%、一昨年は4%、今年辺りは5%とこれまで経験したことのないような失業率を抱えております。フリーターやアルバイトを入れたらもっとも高い率になります。

そして、これは何を意味しているかということ、国の予算が入らなくなるということです。正式に勤めている者のみが、税金を天引きされて納税するわけですから。つい去年ですか一昨年ですか、納税を、確定申告を各自に任せるようになったではありませんか。その各自に任せただがために、国の予算は激減しています。なぜなら、各自の報告になりますと、つい甘く見積もったり報告しなかったり、あるいはただ単に方法を知らないで納税しない人が大勢いるからです。

そこで、衣食住を考えていきましょう。食から出発して一つの測定法として我々のカロリーを考えていますが、このスライドは、国連の発表などで使っていますので英字が出るときがあります。この食物におけるカロリー数のSSというのは、セルフサフィシエンシーつまり自給自足率のことなのですが、40年前は日本のカロリーの75%はまだ国内で作れました。あるいは海で取れたと言った方が正しいのですが、近海で取れたわけです。しかし、現時点ではなんと3割も取れていません。食べているカロリーの7割強が外国から来ています。

別の尺度から言うと、日本の蛋白質源は魚貝類なのですが、40年前、日本は魚貝類を輸出していたほどの業界を誇れたのに対して、今はなんと日本では30%ぐらいしか取れておりません。

これが日本だけの問題ではなくて、実は世界全体の魚の取れ方を見れば、90年ぐらいをピークにして、そこからずっと減少しています。つまり存在する魚が減しているわけです。だから、日本人がもっと頑張ればもっと魚が取れるというわけではなくて、無限に近いと思われた海の魚貝類自体がどんどん減っている方向にあります。業界が頑張っただけでは、補えないというわけです。

では穀物はどうかということ、穀物でも65年では3分の2ぐらいは国内で作れたのに対して、今は2割ぐらいしか日本国内で穀物は取れていません。これも世界的な現象であって、全世界の1人当たりの穀物の取れる、農業可能なつまり耕作可能な土地の面積が、真っ直ぐな線ではないですが、階段型でガクン、

ガクン、ガクンと減りつつある状況にあります。

日本も、たとえ人口が増えていないと仮定しても、穀物生産高が同じようにガクン、ガクンと下がっているのは、農業離れしているからであって、元々田んぼだったものが竹林や笹畑になってしまって、今となっては簡単に田んぼには戻せないのです。

もう一つよく使われる水準が、食物油脂です。85年ぐらいをピークにして日本人が食べている食物油脂、特にダイズ・トウモロコシなどの油が激減していきまして、今は生産高は10%にも至っておりません。

そこで、日本人が昔からどうやって2,600万もの人口を支えたかというところ、サザンダイエット、つまり、肉をほとんど食べない、もちろん鳥もほとんど食べなかったからです。ほとんど魚貝類とダイズ蛋白質を基にして、食生活を営んだからできたのであって、今でもすべての日本人が毎日肉を食べようとする、さらに緊急な事態が生じてきます。中国でさえそのことで今、困っているところですよ。中国人だって、元々毎日肉を食べていませんでした。ところが、肉を食べることが、豊かなことであると勘違いしている中国人が増えてきます。それで、みんなが肉を食べようとするほど、環境をだめにするだけでなく、自分の健康をだめにし、そして、自分の国の自給自足率を全くだめにしてしまうからです。

早い話、大和朝廷時代辺りから、もう奈良盆地、京都盆地、大津辺りでは人口は最大限に達していたわけです。そして、それ以上の人口を支えようと思えば、その土地を有効に利用したい場合、家畜を育てるよりは直接人間の食べられる物を育てた方が有効利用になるわけです。

つまり、菜食主義に近い食生活になります。そして、プラスアルファの蛋白質源、ミネラル、ビタミン源などを魚貝類や海草などから取れば、もう「マル」という食になるわけです。現時点で全世界がノーザンダイエット、つまり、ヨーロッパの遊牧民がずっと営んできた肉食生活を営もうと思えば、この地球は常にもっと飢饉・飢餓状態になります。

全世界が和風、サザンダイエット、菜食に近いダイエットを試みれば、まだまだ地球はあと数十年ほど保てます。そのバランスが取れてないが故に、地球のところどころで、何もアフリカとか南米の話ではなく、このすぐ近くの百数十キロ離れたところで、皆さんと同じ年齢の、同じ職業の、同じように頑張っている人たちがこの冬に食べ物がない状態で苦しんでいるのです。北朝鮮のことです。

誰が悪いわけではありません。その半島が支えきれないほどの人口を作っただけの話です。日本もこの列島が支えきれないほどの人口を作ってしまったのですが、今まで何とか維持できたのは輸出のためです。

輸出へいく前に、もう一つ大事な側面があります。エネルギーのことです。言うまでもなく、私たちは毎年毎年よりたくさんの電力を使いたいわけです。

去年持たなかったクーラーを持ちたい。去年持てなかった自家用車を持ちたい。去年持たなかった何かを、電気歯ブラシであろうと持ちたいとなると、どんどん電気使用量が上がるわけです。すでにほとんどの各地方の電力会社はパンク状態で、これ以上、原発を作ってはいけなし、かといって石油の価格は年々上がってきますし。それで、小泉政権はブッシュに便乗して、イラクから石油を奪おうではないかという軍事の方向に向かっています。

それ以外に方法はないのです。第二次世界大戦でさえ、インドネシアから石油を取るための戦争だったのです。ところが、アメリカの第7艦隊は、フィリピンを含めてブロックをしていましたので、ハーバードに留学していた山本五十六が本意に反して真珠湾攻撃をやらざるを得なかったわけです。アメリカの第7艦隊がインドネシアからの石油輸入をブロックしている限りは、日本国はやっていけなかったからです。

もし日本がこれから戦争に加わるとするならば、北朝鮮に対する問題は全く生じません。北朝鮮のような、人間が多すぎて資源のない土地は、はっきり言って欲しくないからです。もし日本人が戦おうとするならば、石油が欲しいからだと思えます。そういう戦争にならないことを祈りつつ、そのようなことが起こらなければよいかと危惧をしています。

毎年、我々の家賃よりは水道、水道よりは光熱費がどんどん上がる傾向にあります。それと同時に、エネルギーの輸入量がどんどん上がっています。このことを細かく説明する時間はなく、またその必要もありません。あくまで把握していただきたいのが、このトレンドであって、危機感であります。

世界の全石油資源を一つのタンクとイメージすると、20世紀初頭まではほとんど満タンだったわけです。つまり、人類がほとんど石油を使った試しがなかったわけです。

ところが、1930年代前後を中心に、戦争利用もありまして、急激にこの石油を頼る生活を始めました。特に戦後50年代辺りから日本、他の先進国が、そして、80年代、90年代辺りから人口がものすごく多い中国が、そしてインド、アフリカなども我々も石油を日本人並に、アメリカ人並に使いたいと言いつつ出したのです。

それで、一度74年にオイルショックがあったのですが、その時点で、まだこれから開発できる、あるいは、探してもない油田がどこかに潜んでいるだろうという希望があったのに対して、幸か不幸か、現時点ですべての油田の存在と大きさはほとんど把握されています。これ以上出てこないことが分かっているのです。

ところが、これまで石油を頼らなかった大陸や国々が急激にどんどん使おうとしているので、長くて30年、もしかしたら20年しか石油はありません。

ところが、車や飛行機などは、数十年先には存在しません。約束します。ソーラーカーはあるかもしれませんが。あるいは、何らかの代替燃料ができるかもし

れません。しかし、石油は使っていません。なぜなら、存在しないからです。まして、車はソーラーパネルでも動かしますが、飛行機はソーラーパネルでは飛べません。石油のような爆発的な燃料が存在しない限り、そんな重たい物を地球から上げることはできません。だから、飛行場をはじめとして、この飛行機などを当たり前にした産業が、みんなダウンすることが条件ではありません。約束です。もう、どう考えてもこうなるわけです。

いろいろな、同じことを言うような表がありますが、同時に、たとえ石油が自由に使えたとしても、それによって毎日毎日、動植物の種類が激減しています。その大きな理由が石油使用です。NO_x・SO_x・CO₂・一酸化炭素・二酸化炭素などを億年単位で大自然が石炭・石油として貯めた物を、我々がたった100年で全部大気にばらまこうとしているわけです。

地球はそれに耐えられるわけがなく、そして、どんどん……。例えば卵が一番敏感な状態なのですが、これまでに生存できた卵が、これは鳥の卵とは限らず虫の卵、カエルの卵、微生物までもが死んでしまい、その微生物が死んでしまうと、今度は海自体が成り立たなくなるわけです。プランクトンがいなくなると、あるいは、微生物がいなくなると、土自体がもう肥えなくなります。

何も、ハルマゲドンの話ではありません。こう話しておりますのは、いったい我々は、この列島をどの方向に持っていくのかという課題を持って、生き方の課題を考えているのです。

そこで、日本がこれまでできた暮らしは、輸入と輸出のバランスによって、いや、バランスではなく大量輸出によって初めて成り立たせたのであって、日本のトータルエクスポート、全額の輸出量を見れば、85年頃をピークにしてじわじわと下がっているのです。実は、この表は2000年までしかないのですが、今年辺りからもっと下がっています。

それに対して、輸入品が、凸凹はありますが、上がっています。特にこの2～3年あたりは、中国産の物がものすごい位置を占めるようになりました。100円均一へ行っても、普通のスーパーへ行っても、蓋を開けてみれば何もかもメイドインチャイナです。そして、一見安くていいと思う反面、それを買っているお金が我々の手元で作られていなければ、結局貯金を借りて買っているような生活をしているわけです。それが現状なのです。

そのプラスマイナスのことをはかってみると、85年、まさにバブルが、まだバブルではなかった成長期の一番強い時期が、1985、86、87年辺りです。そのときに日本の輸出額は大変大きくそびえて、これだけ我々がお金を得られるのなら、どんな暮らしでもできそうな錯覚を覚えたのです。

ところが、それがだんだんだんだんと下がり、実は今年、たぶん、歴史上初めて日本の輸入額が輸出額を上回る年になります。これが危機状態です。これから我々は生き続けて、贅沢はともかくとして、衣食住を輸入せざるを得ないのです。しかし、それを輸入する資金がなければ、資金を作れなければ、もう

輸入はできなくなるわけです。

その理由を細かく言えば、いろいろな表で分かりますが、製鉄がまずだめになって、繊維がだめになって、家電がだめになって、腕時計からカメラ、科学肥料等々、科目別にそれぞれの業界を見れば、どれぐらいそれぞれの業界が困っているかどうか分かります。その象徴的な一つのところが金融機関なのです。今、日経新聞を読んでもテレビを見ても、金融機関がどれぐらい健康であるかどうかという話がしょっちゅう出るのですが、金融機関は何にも作りません。生産力ゼロ、あるいは、マイナスと考える人もいます。この金融機関が国を代表するバロメータとなれば、その国は空っぽなわけです。本来ならば車の台数で計たり、あるいは時計でも家電でも科学肥料でも何でもいいのですが、これだけ輸出しているというところを、まず日経で読みたいところですが、金融機関の話ばかりだったら、右へ左へ数字を回すだけで何の食べ物も着物も作っていませんので、これが危険な経済だと。言われなくても分かるはずです。

ところが、お金が毎年毎年もっともったかかるとなっているのは、日本が世界の中で、老人の天国だからです。国民の医療費を計ってみれば、もうずっと上がりっぱなしの傾向にあります。特に医療費を使うのが末期の最後の1～2年。日本が善意を持って、全力を尽くして末期患者を救おうとするのはすばらしい姿勢ではありますが、それを支えるほどの資源は残っていません。だから、日本が毎年34～35兆円ほどの国債を刷り続けて、小泉さんが着任した時点でもうこれ以上国債は刷りませんと言ったのですが、結果的にはうそつきで、毎年毎年同じぐらいの赤字を出しっぱなしで、それが積み重なって、今、世界に例を見ないほどの赤字を日本は抱えているわけです。それを国民医療費と老人保険と社会保険支出に分けても、同じような傾向にあります。もう、グリーンときりがなく線が上がるだけです。ところが、先の人口や失業率のグラフを見ていただければ、納税が下がりつつある、保険金を納める人が下がりつつある。この上に上がる出費と入ってくる納費が全く合わない国なのです。

それで、やむを得ず国債と公債をどんどん刷らざるを得ないと。ご存じでない方もいらっしゃるのかもしれませんが、政府がお金を失ってしまい、何のお金もないときにどうするか。二通りの選択にせまられます。新しい札を刷れば札数が増えます。ただ、札数のベースをなしにただ紙だけ増えていたのでは、じわじわとその価値が下がっていきます。だから、それはあまり賢明な策ではないのです。

もう一つの対策は、公債、国債などを刷ります。この紙では、今は価値がないのですが、10年、20年後にこれだけのお金を払いますので、それに対してこの7割とか8割とか9割を納めておいてください。額面より安い額で売りますので、しばらく待っていてくれればもっと高い額で返しますよと言っているのです。国が言っているものですから、普通の銀行やローン会社よりもずっと信頼が高いはずでしょう。

ところが、信頼が高いということは、返す方法が分かっているからという前提であって、最近、日本の公債を買うのは日本人ぐらいです。つまり、外国では、この紙は紙くずであって、信用を失っているわけです。日本は20年先に、何も払い返してくれないのではないかという懸念が、もう一つの世界常識に転じているわけです。これも、財産がないという証拠としての危険信号なのです。

だからどうするのかということになると、これはもちろん財政を立て直さなければいけない必要はいろいろあると思うのですが、これがただ単にお金の話ではないのです。我々の魂のお話です。生き方のお話なのです。

日本人が明治期まで、世界に例を見ないほどの人口密度を抱えつつも、0に近い犯罪率、非常に高度な文明、友好的人間関係法などを身に付けてこられたのは、いろいろな意味で世界の模範ともなり得ます。言い換えれば、これからの世界は、いわば地球の鎖国版になります。鎖国時代はこの列島だけが鎖国に掛かったのですが、これからはこの全地球が鎖国状態になります。つまり、大宇宙からもらえるのは太陽熱ぐらいです。大宇宙に対して我々がゴミをまず捨てられない。そんなエネルギーすら存在しない。ロケットでゴミを捨てるなんて、SFの話です。

拡大せずに存続できる、維持可能な、つまり、サステイナブルな状態を日本が数百年に渡ってできた。これが将来の世界にとっても模範になると思うのです。何も、徳川に戻るというわけではありません。なるべく新しい技術や知識などを利用して、しかし、日本の知恵をもう一度改めて、魂で味わい直す時期が来ていると思います。

日本的知恵の再考

いくつかの方面でそれを考えたいのですが、一つは、「直線的な世界観から循環的な世界観へ」と書きました。西洋科学、いや、科学のみならず、西洋の宗教の多くも、一人の人生をも地球の行方をも、一直線として考えられています。エデンの園から神様がこの世を作りたもうて、そして、数千年先にこの世を裁いて、「はい全部終わり、劇が終わりました」というシナリオです。また、1個1個の人間に関しても、ある受精卵ができた時点でそこに魂が宿った。二度と作られない魂ができて、その魂が一直線の人生を送り、裁かれて、一直線の天国か地獄か、途中で煉獄に行くかということです。

幸か不幸か、これが使い捨て文化には合う。焼き畑とか、もしかしたら遊牧に合う世界観かもしれませんが、ずっと同じ土地を代々大事にしなければいけないところにはつながらないのです。レーガン大統領でさえ、恥ずかしながら十数年前に、ソ連と核戦争にならばかりの時期に来たときに、彼はもし私の指によって、つまり、私の指が核戦争のボタンを押した場合に、これで地球が終わったとしても、それは私個人の責任ではないだろうと。なぜならば、それ

は神が望んだ終わりであっただろうから、というように発言したわけです。

それが極限だとしても、将来的に考えれば、この列島、そして、この地球で循環的にあらゆる資源をリサイクルし、あらゆる農法を有機にし、また、二度と扱いきれない核廃棄物のような物を作らないで、どういられるかという課題を我々は抱えていると思うのです。

また、今は哲学的に「直線的世界観から循環的世界観」と語りましたけれども、もっと生活レベルで言えば、例えば日本語で言う輪廻転生とか、あるいは不殺生とか、もっと簡単に、もったいなく、ありがたくななどの発想がそういう循環型の経済や社会を支えてこられたのではないかと思います。

次々といかなければ時間がないのですが、2番には、西洋では奇跡的な救済論が論じられています。さっきのレーガンさんではありませんが、あるときに我々の意識とは無関係に神様が、「はい終わり、劇は終わりました」というわけです。皆さんも治まるとします。それだったら我々も個人に対して責任はあっても、全体に対しては薄いのです。いつまでにこの地球を守らなければということも分からないし、どうせ長くないし、どうせ舞台であると。自分で作った舞台でもなければ、行方が長くない舞台でもある。

しかし、因果応報的に考えると、我々の蒔く種が必ず芽生える。善し悪しであろうし、また、その種が、自分の行動はもちろんのこと、自分の言葉、発想、接し方などでもあります。この因果応報という考え方が、この体が消えてからも自分に跳ね返ってくるという発想なのです。そして、その跳ね返ってくる自分がまさに魂なのです。自分がうそをついたときでも、たとえそれがばれてなくても、うそをついたということ自体が自分の心の中で、良心の中でムズムズと痛み出します。それも因果応報の一側面です。

あるいは、廻り廻って、あなたがこう言ったのではないかと思わぬ人から言われたとき、「えっ！」と真っ赤になることも因果応報です。遠いあの世の存在によっていずれこの全体が裁かれるのと、自分の蒔いた種が自分に跳ね返ってくるのでは世界観が全然違うのです。この地球の将来を考えれば、後者、つまり、日本人がずっと持っていた世界観の方が責任的で良心的でサステイナブルではないかと思います。

3番、自然支配から自然崇拜。崇拜という言葉が好きでなければ自然尊重という言葉にしましょう。仏陀は、あらゆる苦しみは現実と希望との差から生まれると説いています。その現実と希望との差、つまり、物事が思うようにいかないということを梵語で「ドゥッカ」と言います。これを日本語で苦しみの「苦」と漢訳しています。仏陀の言う苦しみ、「生老病死」は苦しみというのは、何も今、苦しいという意味ではありません。物事が思うようにはいかないという意味です。なぜなら、自分以外の実在が存在しているからです。

そして、仏陀の解決策は極簡単です。ありのままの現実を受けとめることであって、欲を捨てることです。

ところが、科学の親と言われるフランシス・ベーコンという方が、非常に対照的です。16世紀に、フランシス・ベーコンという判事がいました。500年前のロンドン、エリザベス一世のときに、それもロンドンの人口が限界に達しているところで、お互いに冬を過ごすために、凍死しないように石炭を盗んだりパンを盗んだりしているという状況だったのです。それで、ベーコンはそれぞれの盗み人を死刑に命じなければならない立場だったのです。これが苦しかったためか、60歳にして本人は判事を辞めて、科学をやり出すのです。彼の研究課題は、どうやって同じ国土でもっとたくさんの人に穀物を与え得るかという課題なのです。

そこで彼は交通手段の改善とか、食料保存とかを工夫しようとしたのです。有名な話ですが、鶏肉を凍らせようとしてその殺した鳥達を、雪が降る中、氷の中に入れ凍らす実験を冬の間に行っているのです。肉を少しでも長持ちさせれば、もっと遠くへ運べて、もっとたくさんの人に与え得るからです。

そして、70何歳のベーコンは、インフルエンザに罹って死んでしまうのですが、ベーコン及びそれを引き継ぐ科学思想家達は、現実と希望が合わないときに、現実を希望に合わせようではないかと、暑すぎたら冷房機を作ればいいじゃないか、寒すぎたらもっと石炭を掘り出して燃やせばいいじゃないか、バナナがお宅でできなければ、できるところから運ぼうではないかと説くわけです。

一見すばらしい、それこそイギリス貴族並みの発想なのですが、全世界人にとっては少し無理があるのです。すべての現実を個々人の希望に合わせることは、この地球では許されません。なぜなら、いくら満足させたところで希望はそれに先走りしています。

自然尊重の考え方に移りますが、雨が降らないときに銀の分子を雲にばら撒いたら、雨を降らせうるなどの実験すらありました。あるいは、台風に爆弾を落とせば台風をなくせるという実験もありました。結果的には、人間はそこまでの支配力はできない。経済でさえ上手く支配できないのだから、ましてこの大自然を全部人間の頭で支配するなんてのもってのほかなのです。

そこで我々が程を知り、謙虚に自然は我々の知恵よりも魂よりも大きい、それを恐れつつ、それに従うように、合わせるようにすることが日本人の知恵ではなかろうか。それにちなんで、「科学万能主義から包括的有機世界観へ」と書きましたが、もっと俗っぽく言えば、自然支配からというのが自他同一というもので語れますし、自然本位という言葉は、宗教的な立場でいろいろなほかの意味では使えますが、もっと俗っぽい意味で、我々と自然が同一であるという側面もあります。

それから5番目には、個人主義から相互依存という認識へ戻らなければと思うのです。個人主義というのは数千年前のエリート白人男性の錯覚です。それを言っているホームズ、ロック、ヒューム、カントなどの啓蒙主義哲学者のすべては自分で料理ができません。召使がいて、助手がいて、馬車の運転手がいて

て、たくさんの下男・下女がいたがゆえに自分は自由なのだと唱えているのです。そのような人を見て暮らしていると言えますか。

そして彼らが気づいていないことは、今私がしゃべっているときにあなたはしゃべれない。今、私が吸った酸素をあなたは吸えない、ほかの木がそれをもう一度二酸化炭素から酸素に戻してくれない限り。私が飲む水を、清めないとなんが飲めないし、私が燃やすエネルギー、それは核燃料であろうと石炭・化石であろうと、誰も二度と使えない。だから、燃やしたら自由ではないかというのは、あほかいと思うような、非常に近視眼的で全体を視野に入れていない、啓蒙どころか盲目主義なのです。言い換えれば、彼ら貴族にとって、限界にはまだ達していなかったのです、まだ余裕があるかのように思えたからです。

ところが、我々は限界に来ているわけですから、そういうわけにはいかないことをつくづく感じるはずですよ。

同時に「競争社会から協調社会へ」という問題があります。小泉をはじめとする連中が、日本の競争力は足りていないと言っているのです。ところが、この競争力というのは日本人同士が十分に殺しあっていないということなのか、それとも日本全体が諸外国に対して競争力を失っているのか。単純に考えてもみえみえです。後者のほうですよ。日本という国が、諸外国に対してもっと競争力をつけなければならない。

ところが、日本の成長期は何の競争力によってできたかというところ、国内の競争力ではないのです、国内の協力によって、みんなの力でこれだけの生産ができたのであって、しかも失業もさせずに、上下をつけずに済んだわけですよ。

そして今度、小さなアメリカ的な競争を唱えているのですが、それはどちらが偉いか、私かあなたかという日本人同士を敵対させる、首切らせるような意識であって、それによって日本がより強く中国に対して戦えるか、少し疑わしいと思います。

「富と消費の賛美から成人道へ」と書きましたが、ご存じない方がいらっしゃるのかもしれませんが、徳川時代、法律によって消費が全て定められていたのです。身分は「士農工商」だけではなく、その中の様々な身分が更に細かく分けられています。

農の中でも、商の中でも、工の中も。それによって、徳川立法によって古米を食べてよいか、混ぜ飯を食べてよいか、混ぜ飯ならば麦・粟・黍を何割ほど古米と混ぜて食べるのか法で決まっています。誰も自由にそれは選べないのです。家庭によって何着の着物を持ってよいかということも法で決まっています。絹一着、麻三着、綿二着などと。

それを解き・洗い・縫い直して、もうボロボロに座布団になるまで使い、新しいのを作っても、買ってはいけない状態です。家の中の箆箆を何竿持つかどうか決まっていますなど、なぜなら、限界にきているのですから。おまけに、毎年の正月にむけての大掃除になると、家の前で自分の持ち物を全部ひろげま

すので、自分だけが隠して持つなどということは有り得ないし、常時、村人は全部自分の家に入出入りしているようなものだから、隠して自分だけが持つということは有り得ない村社会です。

枕の素材も法で決まり、旅行だって禁じる。テレビ劇で江戸時代に人が旅行しているのを見せられますが、それは有り得ない嘘の話です。唯一、旅行しているのが奉行・大名などの行列と、あと雲水のような、つまり僧侶たち。あと、お参りの許された人たち。熊野参り、伊勢参りなどは特別許可をもらって、人生に1～2度は伊勢には参ります。

ところが、我々人間はどうしても自分を評価されたいし、人を評価したいわけだから、現代の資本主義に惑わされている我々はい、「あっ、ベンツ、偉いじゃない。アルマーニ、いいスーツ持ってるね」と言うのです。その表面や、金額等によって、むしろ我々の目が、魂まで見えなくなっているのではないのでしょうか。

江戸時代の人、制服どころか、皆同じものを着ているのです。当時の絵などを見れば、男性は夏の間は褌だけです。冬になると笠を被ったり、ちょっとした2～3枚の羽織りとか袴を。いや、袴はめったに着ない、履かない。何と言うか、上着を着ますが、皆一緒です。

車を持つ人は大名ぐらいです。すると、どうして人を評価するかというと、全く違う水準を使うのです。例えば、この人はもしかしたらお料理が上手い、この人はもしかして算盤が上手、この人は釣りが上手、この人はカカシ作りが上手いと。それで、カカシの方が算盤より上か、下かということもないのです。

算盤も欲しいけれど、カカシがいなければ米は取れないのだから、上手なカカシ作りも必要なのです。全ての人が、自分が社会における役割を持ち、そして、それによって評価されるのです。

自分はもっとよい料理を作りたい、もっと優れた算盤の三段・四段・五段を目指したい。釣りとして、もっといいものを釣って、もっと皆に食べてもらいたいという気持ちで。つまり、「なんぼの人か」と言われたときに、その「なんぼ」というのを大阪風に金で換算せずに、どういう腕を持つ人、どういう人格を持つ人かと考えるわけです。

そして、これは「成人道」とも呼ばれていますが、つまり我々人間が生まれながら人間ではあるまい。DNA的には人間かも知れないけれど、人間になるのに十何年もの訓練・社会化・理解・教育などがあって初めて大人なりの、成人なりの行いを自分で取れるわけです。そこで初めて成人として認められるわけです。本来の成人式ではね。

私が日本以外に一番長くいたのはハワイなのですが、ハワイではまさに人を体とみなすのです。そうすると人生のピークはいつかと言うと、二十歳前後です。一番力強い、一番セクシーな、一番見るからにもピカピカの体をしているときです。そうすると、次の皮肉が生まれます。

30、40、50、ましてや60、70になると、皆いかに自分がまだ二十歳に近いのだということを見せんばかりの態度を取るのです。手術・お化粧品・お洋服・態度やら、惨めなのですよね。老いに勝てる人は、存在しませんから。

本来なら、例えば「道」の発想で考えると、18、19の若者に筆と綴り石をあげても、字は書けるけれど大した字ではないですね。要は練習というところですよ。

もちろん、筆をあげたいのです。練習を始めてもらいたいのです。だが、10年、20年書いてみて味の出る字が書けるようになります。そして、どうなるかと言うと、70、80に素晴らしい字が書けるのです。

これが盆栽についても、お華についても、茶道についても、色々な、いわゆる「道」について、本当に人間の腕を研く場合、これがただ単に速く走るとか、高く跳び上がるとかいうことではなくて、同時に魂を研いているわけです。その魂が、今度は自分の華・茶・字で現れるわけです。そうすると、当然ながら80の方が、えらい字が書けるばかりか、こちらがそれを見れば「はぁー」と、尊敬できるのです。若さへの無駄な競争が、昔の日本にはなかったのです。

そして、「絶対的・不変的価値体系から共通の価値体系へ」というところに関わってきます。一見、科学、あるいはその裏にあるかも知れないユダヤ・キリスト教、イスラム教の価値体系が唯一絶対であるかのように伝わってきました。

また、我々も中学校・高校などで、科学は絶対的に正しいというふうに学びます。でも、それが全部一つの信仰であり、高度な科学を学べばそれが全部仮説の歴史にしかすぎず、また、その科学では説明できない側面が散々あるということが分かってきます。

日本ではそこまでの量子力学的な科学は発展していなかったのかも知れません。だが、人間を受け入れたり、人間に対する察する能力、思んばかりの配慮、気配り、言われなくても分かる以心伝心など。これらがある意味で、科学と全く異なっても維持すべき価値体系ではなからうかと思えます。

そして、それが科学と何もぶつかりあったり、反したりしていません。科学は科学として一つの価値体系として大事です。もし電気をつけたければ、もちろん科学の論理なども知らなければ駄目ですが、でも研究家で、企業でも、家でも、上手に一緒に生活したい時に、いくら電子の流れ方が分かったところで何の役にも立たず、相手の気持ちを察してから言葉を選ぶことの方が先決なのです。

だから、両方が人間にとって必要なのに、これまでの教育はどちらかと言えばこの電気ばかりに力を入れて、もしかしたらそれは家庭などが、その心的・魂的教育をずっと営んでいたからであり、学校に頼まなくてもできたからかも知れません。だが、残念ながら今は、家庭ではできているとは言いがたい。

教育体系の中でも、人を思んばかりの心の教育、魂の教育が要求されるように

なってきたるわけですから。これが何も西洋からの輸入ではなく、元より日本が西洋より、より豊富に持っている伝統であり、その再発掘・再認識で十分なはずなのですが、ただ机上の知識で終ってはつきりません。

今の倫社教育だってそうですね。受験科目に倫社教育を選択して京大に入ってくる学生でも、見事に「孔子は何年に何の論語を書いたのか、アリストテレスは何年に何のエティカを書いたのか」ということを答え得るのですが、それなりの行動を取れるかと言うと、取れていないのです。

今、私が言っている心の教育・魂の教育というのが、机上の言葉のオウム返しではなくて、身につける行動に伴うものです。

ここで取りあえず、「生」の部、第1を終わらせていただき、「死」の部へいきます。

身即心の健康

物事がうまくいかないとき、自分の体が健康でなくなるとき、単純に話すと、末期病棟に行きますと殆どの方が寝たきりのお婆ちゃんたちです。だって、女性は男性より長生きしますし、男性ほど運動はしません。

骨が脆くなり、ちょっとした捻挫や骨折等で入院して、その方が楽だと思ってしまう。1ヶ月も入院しているうちに、更に筋肉も骨も弱くなり、結果的にずっとズルズルそのまま寝たきりです。

また、死の原因の多くは脳溢血、心臓病、癌のいずれかです。そのいずれかがどこからきているかと考えると、生活からなのです。百年ほど前までは殆ど日本人の死因が、外部からやってくる病原菌によるものでした。ペストだの、コレラだの今でいうO-157のような感染症・インフルエンザ等です、結核もそうです。

ところが、北里などの大発見によってワクチンができたり、また、環境事態もかなり消毒されてきましたので、皆さん感染症で死なないのです。むしろ、大騒ぎになるほど感染で死んだというのが例外的になりました。

感染のいいところは、一発にやってくる代わりに直ぐに死ぬか、立ち治るかです。また、場合によっては注射などによって治せる。それに対して動脈硬化、諸々の脳や骨、あるいは、癌などは何十年もの生活によってできあがるものですから、一発の注射で治せそうにないのです。

辛うじて治そうと思えば、何年もの生活の新たなスタイルで試みてもらわないと治るものではないのが殆どです。治るのに、また防ぐのに、時間がないので俗っぽい話をしますと、免疫力が必要なのです。

この全人的な健康と免疫力の基礎を考えれば、一つには体力が必要なのです。その動物的・肉体的な力としては自然食の生活、まさに先ほどから語っております大豆や魚の蛋白質を中心にした、海藻をたくさん食べる和食が理想なので

す。

それから、有酸素運動が不可欠であって、我々がストレスと感じる度に、体が猿と一緒に反応をします。猿は蛇を見るとストレスを感じます。戦うか、逃げるかを迫られます。我々も上司に何か悪いことを言われたらストレスを感じます。そこで逃げることも、戦うことも許されません。「そうでしたか、すみませんでした」と、内部にストレスを抱えるのみです。

バスに間に合わないとか、締切りに間に合わないとか。これをどうしようかと思う度にストレスを抱えこみます。そのストレスは猿にとっても、我々にとっても大きな変化を三つ起こします。まず、胃酸が増えて今は消化している場合ではないと消化を押さえます。次に脈が高まります。戦わなければ、焦らなければ、と思うからです。

更に血液がトロクになります。なぜならば、猿が逃げながらケガをするかも知れない。ケガをするときに大出血をしないように血液がトロクになります。だが、我々はストレスを抱えたまま、胃酸が殖えて胃潰瘍になる。脈が上がり、脳出血になる。血液がトロクなり、動脈硬化になる。

その唯一の治し方が猿と全く一緒です。有酸素運動です。つまり、数十分「フー、フー」言うまで続けられるような歩きでもいいし、走りでも、ジョギングでもいい。自転車でもいいし、水泳でもいい。庭仕事でもいいし、廊下掃除でもいい。汗をかくまで「フー、フー」言うまで運動することです。

日本人の中で「いや、カラオケやゴルフなどによって忘れるぞ」と言う人がいるのですが、頭で忘れていただけです。体を測ってみれば何も変わっていません。ただ、忘れていただけ、体は依然として悪いままです。

スキンシップ。昔の家庭では口も使わず親の肩を揉んだり、一緒にお風呂に入ったたり、手を取ったり、色々な作業を共同にしていました。実はこの手、あるいは体、この肌から通じる力、記憶が並々ならないものです。今の言葉などよりも遥かに大きい。

体の記憶は非常に深いものです。だから、お母さんに抱かれた記憶とか、結婚したときの記憶とか、あるいは、仲間と肩を組んで踊った記憶、盆踊りなどでも。非常に深く身につくばかりか、これは健康づくりにも大事なのです。

それから睡眠ですが、睡眠の取れない人は、私の研究室などにも後をたたく出入りします。というのは、私は自殺防止カウンセリングが一つの専門領域ですが、自殺を試みている人の殆どが慢性睡眠不足なのです。

なぜ寝られないのかというのは個々人の原因、心理的な原因もありますが、殆ど共通しているのが運動をしていない。運動をしていなければ、頭ばかり疲れても体は疲れていないのだから寝つかれないです。最低、毎日20～30分歩くだけでも、体がそれなりの疲れを覚えたなら、もう寝る時間かと思うときにスーッと考えずに、気持ちのいい睡眠に入れるのです。全部つながっているのです。

これが、まだ、魂というところまでは少し至らないのですが、少し近づいて、

今度は自力的な方面で考えてみましょう。

健康を自力で備えようと思えば気力が必要なのです。その気力はどこからくるかと考えると、一つには目的意識。これがしたい、これを成功させたい、この運動に加わりたい、「たい」というところから元気が出ます。何もしたくない人こそ元気を失うのです。

それから素直な倫理実践。つまり、見返りなどを考えずに人に「先にどうぞ」と言ってみたところ、その人が「いや、どうも」とほほ笑んでくれる。そのほほ笑んでくれることを期待してやったのでなければ、大人ならば、非常に気持ちよく感じてくるはずです。

子どもたちだって、我々だって、人にいいものをもらったら、人に分かちあげてあげたいと思いますね。それで、いずれ何かを返してくれるからではなく、その分かち合う過程自体が気持ちいい、健康なことであるからです。

また、そういうものを一緒に食べる方が、単独でコソコソ食べているよりは健康なのです。元々、我々が猿類から人類に進化した際にも、やはり単独行動は滅多になく集団で行動してきたわけだからでしょう。

それから純粋な共通感と言うか、一体感と言うか。先ほどの話ではないけれど、皆が同じ目的を持って、この一つの事業を成功させたとかいうことです。日本人は祭りが好きだと言うのですが、それは学園祭であろうと、一つの大きな催しものにしても、あるいは、例えば娘を結婚式まで送り出すというのは、家族にとって大きな節目になり、皆が無事にそこまでできたことが良かったということで、やっとなお婆ちゃんも安心して他界できるような話をいっぱい聞かされます。

逆に、その送り出すとか、一緒に行なうことも元気の源の一つなのです。そして、また、死を意識することも不思議と元気の源にもなります。というのは、死を意識していると、この一瞬の二度となさを初めて自覚するのです。

茶道などで「一期一会」などと言います。では、一期一会で、今、一瞬を満喫しろと言われても、「えっ、どうやって」と思うでしょう。ところが、二度とないと実感したときに自ずからそうしたくなります。

例えばよく使う比喻ですが、中学校を卒業し新たな高校に行くとなったとき、もう二度と、この中学校への通学路を歩かないであろうと思った途端、何でもなかった当たり前の壁やら、並木やら、風景が別にかわったものでもないのに恋しくなってしまうのです。

そして学校に辿りついたときに、これまでに喧嘩ばかりしていたあいつだって、逆に抱きしめたくなくなるようなきもちになり、あれもこれも喧嘩もしたのだけれど、もう二度と会えないと思うと恋しいのです。

武士も墓場などで瞑想をくんだりしますが、自分がいつ死ぬか分からないという覚悟で瞑想をくむわけですが、その瞑想がただ単に平気に殺され、あるいは、殺せるためだけではない。同時に自分の先祖とのつながりを考えつつ、今

の一瞬は二度とないという一期一会を悟るための瞑想でもあるわけです。

少しずつ、この健康法が食生活と運動生活からメンタルな側面へと転じていることがご理解いただけますでしょうか。更に、この人力、自力から、その延長線上で、よい人間関係、笑い、また、自然との関係、例えば外へ出るときに青空や夜空でも見上げて、その一体感を感じるということも大変に健康的なのですが。

更に、もう一つの次元、いわば、魂のスピリチュアルな次元があると思うのです。これが小さな自我を超えるような精神力、日本語的に言えば「他力」に気付くことなのです。我々が、いつ他力に気付くかと言うと、まず、自分が失敗する時、自分の限界を知る時。自力でいくら頑張っても試験に受からないとか、いくら頑張ってもあの会社からやとってもらえないとか、いくらがんばってもこの患者を治せない時とかです。

そういうときに藁を掴むようではあるかも知れないけれど、初めてこの宇宙が自己宇宙ではなく、自分を超える力が存在しているのではないかと思ひ出させられ、何とかその力と連携して自分を超える力に頼んだりします。またそれが幼稚な場合は祈願なのですが、もう少し成長した祈りでしたら自分が無我になり、ただ単に受からせてくれと頼む話ではなくて、「よかったら受からせてくれ」と、そのために何を考えればよいのかと聞いて、本物の沈黙を設けて無我になる。つまり、自分を超える力からの答を聞ける場を設けないと、一方通行の頼みで終わってしまう。それも一つの祈りだと思うのです。

また、吉田神社の宮司がよくこぼすのですが、色々な願かけ、お参りにみえる、絵馬などを描く人のほんの2割ぐらいしかお礼参りに来ない。そういうことから、自分の神様が、自分の祭っておられる神様が2割ぐらいの人しか助けてないかと考えると、そんなはずがない。もっと高いはず、少なくとも半分ぐらいは叶っているはずであろうと。絵馬を見れば、常識に考えればです。だが、満足すればもう神いらず、という俗の心で動く人がいるわけです。このような支えてくれている力に対する感謝の念も、本来なら日本にもありました。

駒沢大学は何年か前に次のような実験をやったのです。ある非常に忙しい社員食堂ですが、出される定食は皆決まっております、どの社員でも入れればその定食を出され、皆直ぐにもらえて食べられて、食事を済ませて職場に戻れるような仕組みになっているのです。

その食堂で半分の社員に、食べる前に1分ほどの黙祷を頼んだのです。その1分ほどの黙祷の間に、まず、一粒一粒の米に太陽の力も、雨の水も、大地の栄養素も入っている。それに百姓さんの汗も、運送屋さんの心配も入っている。色々な人の配慮、それを炊いてくれたお婆さんの苦労もあって、初めてその一粒が自分の口に入るのだと。それを考えれば、自然に感謝しますね。その半分の社員にはそういうことを命じて、他の半分の社員には普通どおり取って直ぐ食べる実験をしました。そして血液・尿検査などで分かったことは、もらって

直ぐ食べて直ぐ職場に戻る人はどんな素晴らしい食事を出されても、その6割ぐらいの栄養素しか利用していないのです。あとは全部汚物で流してしまっている。つまり、消化が非常に浅いわけです。

逆に、その感謝して落ち着いて「いただきます」と言ったグループは殆ど100%ほどの栄養素を、どの食事からでももらえていたわけです。この「いただきます」という感謝の念が、飢饉に近い状態の国の知恵でもあり、上手に僅かな栄養素でもフルに活用する素晴らしい知恵ではなかったかと思われま

す。今の話は非常に、物理生理的な現象に戻し、還元した話なのですが、もっともっと大事な話は、心の話です。その「毎日食べることができるといことはありがたい」と思う人と、「誰だって食べる、食べるのは当たり前、おいしくないではないか」と思う人の心の差はとても尿検査では測れないのです。瞑想も、除霊・鎮魂などのことも、単なる儀式としてではなく、困ったときには大事なことだと思えます。

実は、百年ほど前に殆ど全ての日本人が一種の瞑想をくんでいたのです、ご存じですか。いや、正座をくんで、座禅をくむものは1割もない。5～7%ぐらい。残る九十数%は時計すら家にはない時代の庶民です。ですが、朝晩お線香を仏壇前に立てて、「ナムアマダブ」若しくは「ナンミョウハウレンゲキョウ」、若しくは「ナムテンリオウノミコト」などととなえていました。私は特定の宗教を推しているわけでは決してありません。

この唱えごとが見事に瞑想なのです。私が大徳寺で座禅を長いことくんでみて、また知恩院では、木魚を叩きながらの念仏などをやってみたのですが、大徳寺で無我になれと言われても私みたいな凡人にはできないのです。

座りっぱなしでは、つい他のことを考えてしまうのです。窓を開けっ放しにしてあるのではないかとか、あいつはいつ電話くれるだろうかとか、足が痛くなったとか。ところが、皆と一緒に合わせて「トン、トン、トン」と木魚を叩きながら「ナムアングブ、ナムアングブ、ナムアングブ」ととなえると、10～20分も叩いているうちに何も考えられなくなってしまいます。

体も声も忙しいし、雑念が入る隙間がないのです。これは見事な瞑想法です。先ほど私がストレスへの唯一の解消法が酸素運動だと説明したのですが、唯一の予防法が瞑想なのです。

つまり、同じように二人が上司に叱られて、「これでは駄目ではないか」と言われたときに、前もってその朝に念仏などを唱えていると「悪かった、やり直します、出直します」という時に腹が立ちません。

日本語では「腹を立てる」という表現をしますが、実は立っているのは腸粘膜です。顕微鏡で見れば腸の細胞が立っているのです、ピリピリと。

それで瞑想や念仏などをくんでいない人の腸を顕微鏡で見れば、叱られたときに表向きには「悪かった、出直します」といいますが、内部はムカムカ、ムズムズで腸が立っているのです。それで、便秘や下痢になる人も多いのです。

体と魂は切っても切れない関係にあるのです。これは何も、あの世の話ではありません。我々の生き方によって考え方も健康法も変わってくるわけですが、皮肉なことに明治期の人たちが我々と違って締切りもなければ、腕時計もしない、何分までに勤めに行かなければということもなければ、成績などもない。しかし、現在の我々は色々な意味で、分刻みで人生を送っているのです。何分まで話して、何分まで電車に乗り、何分まで何をする。それ事態がストレスです。

それから無意識のうちに騒音は入ってくる、排気ガスは入ってくる、ディーゼルが通る。これも無意識のストレスです。彼らが考えられなかったストレスの中で我々は生活しているのに、つまり、先輩がストレス予防法の優れた対策を実践していたのに、多くの我々は知らないか実践をしていない。

この辺りも日本人の魂を再発掘というよりも、再実践していいのではないかと思いますね。

死を目前にして学ぶこと

最後になります。ベッカーのことだから「死」をテーマに入れることになったのでしょうけれども、死から学ぶことが多いのです。

これから紹介するいずれも、私の独断の発想ではなくて、先立たれた日本の、いわば先輩、末期患者の日本人に教わった知恵と言うか、覚えていたい教訓です。亡くならんとしているお婆ちゃんなどを相手にして、何が大事なのかと私が聞かなくても、誰だって寝たきりになると自分の人生を振り返ってみて、何が良かったか悪かったか、何が大事なのかどうかということを考えます。

そこで何割もの患者が、感謝の心を挙げます。何気なさそうに見えるものの、そういうことによって人生が充実していたというお婆ちゃんもいました。それから、何が良かったか悪かったかと更に探究します。ご褒美を求めて何かをやったことが日常茶飯事です。金をもらうからとか、褒めてもらうからとか、昇格人事に有利だからとかいずれ見返りがくるだろうとか。

そうではなしに、例えば次のようなお婆ちゃんもいるのです。人生を振り返ってみて何が良かったかと考えていると、「あの古い木造の校舎に、まだ小学校に通っている時に、ある時私一人で歩き出ようとして、誰もいないことに気付いた。そして教室が妙に汚く見えた。そこで誰もいないけど竹箒を持って自分で床を掃いて、椅子を正して、陛下の写真も正してお礼して出た」と。

「えっ、お婆ちゃん、何十年もの人生を振り返ってみて、それが良かったというのですか」。第三者の私が考えれば、例えば子ども産んだ時とか、子どもが結婚した時とか、何か家自体が成功したときを考えるのですが、「いや、ベッカーさん、むろん出産も結婚もそれなりに楽しかったし、意味深かったし、記憶にあるが、そのいずれも何か見返りとは言わないけれど、ご褒美を思ってや

るようなものだ」。結婚式をやれば人がどう評価するかという話ばかりですね、特に京都では。

それらのことは自分のためではないです。見る人、来る人のためのようです。出産だって、自分のためというよりも家のため、親のためなどであったりしている。だが、「あの時、やれと言われたことでもなければ、何か私に返ってくると考えたわけでもなく、ただ、やった方がいいと思ったからやった」と。「なるほどな」と思うのです。

別の人、小鳥が自分の雨戸にぶつかり、羽を折った時、自分がその小鳥をお粥や牛乳などで育てて、やっともう一度飛べるように育てた。そしてある日、飛び去られたと。それが人生の大きなできごとの一つだと。

なぜなら、純粋に命へ何かを貢献したから誇りに思えるのであって、人に頼まれた、言われた、期待された、あるいは、ご褒美をもらえるからやったのではない、というのです。

あるいは、協力しあえる人間関係は最大の宝物だという人もたくさんいます。先ほどから話している催し物とか、共同作業の苦しみもあればやった時の喜び、何かを得たからという喜びもあれば、共同にやっている最中に連帯感に気付かないときが多いのですが、振り返ってみればその時に我を忘れるほど皆と本当に一緒になっていたんだということ、後から気付きます。

その連中なら信頼できる、その連中となら話が通用する、その人とならば、もう疑えない、というような人間関係づくりが、利害関係ではなしに共同作業によって生まれるものです。こう先輩は言われたわけです。

あるいは、周囲に対する配慮としては、これが少し人まちまちなのですが、例えば自分の延命治療を望まない人が多々います。今の医療制度ですと、ついついたくさんのチューブを着けられて、下手をすると喉を切られ人工呼吸器を着けられる。もう次々、次々と医療がエスカレートするのです。

私が会っている患者の何割かは、そういうのを拒んでいる方針の人達なのです。つまり、自然死を目指したいがために尊厳死宣言（Living Will）などをちゃんと作っておき、そして結果的に自然な形で死ぬようになるわけですが、それを誇りに思っている人もいます。家族にも、自然にも負担をかけずに自分らしく終りを迎えると。

「入るときよりきれいにしておよう」という話がありました。私の学部時代まで遡りますが、学部で私はサイクリング部にはいなかったのです。これは私の日本の学部時代の話ですが、紀伊半島などを回っているときに「青年の家」に泊まりました。

そこでは、あるおじいちゃんとお婆ちゃんが管理人をやっていて、我々を夜の集いに呼び寄せて「諸君、この『青年の家』を見てごらん、これだけ広いところで婆ちゃんとしただけでは何とも管理しきれない。全部きれいにしろと言わないけど、今の状態を見てごらん、どこか一ヶ所でいいから、入ったときよ

りもきれいな状態にしておいておくれ。そうしたら、次の団体が入ってくるときに、今よりは少し使い勝手が良くなるから。この精神を持ってずっと婆ちゃんと二人で「青年の家」の管理が成り立たせてきたのだから頼むぜ」と。

「なるほどな」と思いました。それで、一人が窓拭きをし、一人がトイレ掃除をし、一人が廊下を磨き、一人が雑草取りをし、何か自分の気付いたところで、何気ない行動したのですが結果的に全体がきれいになっていったわけです。

それが私の話なのです。死ぬときに、臨死体験や末期患者からの話ですが、自分の人生を振り返ってみる時に言われることは、宗教より恐ろしいことを言われます。諸宗教では裁かれると言います。

イエス様だの、パウロ様だの、閻魔大王だの、多聞天だの、とにかく、何か偉い、得体の知れない神様が、「はい、あなたは天国。はい、あなたは地獄」と言う。それなら納得するかも知れない。ところが、もっと恐ろしいことに自分で自分を裁くというのです。一番自分をよく知っているのは自分、一番何のために何をしていたかということを知っているのが自分です。そして、それが本当に心から良かったと言えるのか、怪しかったと言わなければいけないのが自分だということです。

そういう恐ろしい裁きを我々が待つならば、もう死まで待たずとも今夜布団に入ったときに、その日に何が良かったのか悪かったのかと考え、悪かったことがあるとすれば、翌日早速、その人に対して「昨日こう言ったのは、ああいう意味ではなくて、こういう意味で言ったつもりだったのだけど」とあやまる。それで彼が「いや、いや、よく知っているから、そんな気にしないでいい」と分って許してくれる。

その電話をしてなければ、ずっと傷を抱えたままだった。でも、傷を抱えたままの人は絶対言わない。ただ、人間関係が冷たくなるだけ。

あるお婆ちゃんは、亡くなる前に「このように生活して生きてきたが故に、様々な形で私がこの地球を汚してしまった。大量の水も、動物も、植物も殺して、汚した。そして自分の勝手に色々なことを悪くした。しかし、この場所に関しては自分が生まれたときよりも、きれいになったと思う」と言ってくれたのです。

先ほどの「青年の家」の話に因んで、「なるほどな」と思いました。人それぞれなのでちょっと匿名性もあり、余り詳細には言えないのですが。

阪神大震災の直後に、私も他のいろいろな宗教団体も、燃えている瓦礫ばかりのところに出入りをしました。そして、あるたくさんの神戸人が集まったところで私と医者と弁護士三人で講演会みたいなものを行ったのです。講演会の後で、みんなからの質問の時間になると、「宗教をやって来られたベッカーはんに聞きますが、人が死んだら、魂はどうなるんや」と聞かれたのです。そのときに私が国立の大学の教授の立場を守らなくてはと思って、「いやあ、一概

にはいけないような」と、お茶を濁したような答え方をしたのです。恥しい話です。会場はシーンと冷たい空気が打たれた感じでした。

そうしたら後ろから、ある老人が立ち上がって、「あんたらは権威者か、何だかは知らんけど、魂は死んでも一緒におるで。わいには分かってるで」と言ってくれたのです。

そうなのですね。私も感じていたのです。

震災の犠牲者と呼ばれる遺族の中で、その翌日、死んでから自分の親や娘に会っているという人もいます。「金庫をこう探せば出てくるんだよ」と知らせをしていった人もいます。幽霊と言いたければ幽霊かも知れません。心の中の投影と言いたければ心の投影かも知れません。だが、その情報を持ってなかったのに、その情報を持っていたじいちゃんが、きちんと伝えてくれているのです。経験的に。

こういう実話を公に話せない教育の場は教育の場に成り得ますか。掛け算やら、経理やら、物理やら、いろいろな専門領域より、一番心にとって大事な話、人に死なれてどうなるとかという話すらできないところが教育現場と言えますか。

たとえば言えば、我々が小学校にいるときは、中学校や高校のことを余り考えない。だが、中学校に行きたい。まず、中学校はあるということを知って、そしていい中学校に行きたいために、これくらいの漢字を覚えねばということを知らされます。そこで、はじめて中学校に向かった生き方をしだします。

たとえば言えば、死がこの人世という学校の卒業かも知れないけれども、すべての終わりではないことは日本人には言うまでもないはずの事実です。だが、それを無視している限り、盲目の小学生と一緒に、目前のことばかりに囚われて遊んだりして、中学校に行く時期がくれば「えっ、私はどこに行けばいいの」となってくる。

それと比べたら、我々が既に中学校に行っている先祖、先輩などにつながっており、彼らにも恥ずかしくないような後輩になりたいという日本的な意識があれば、この小学校の生活だってより懸命になると思うのです。

日本の伝統的生死観でいえば、まず年輩や老人を大切にすることはいうまでもない。先ほどの「道」、「聖人」の話でもありますが、そして同時に、死が終わりではないので、自然に潔く往生するわけです。

往生というのは往くことであって、生きることである。どこに往って生きるかということ、ご先祖さまと一緒にです。それなら、怖くも痛くもない。そして、先祖が亡くなっても身近にいるということは、先ほどの神戸の話も然りですし、いろいろな知り合いからもそういう話を聞きます。

親しくならないと、もちろん宗教という抵抗感があり話せないですが、親しくなって一緒に飲めるような、しゃべるような仲になると、「いやあ、実は」という話が次々と出てきます。

そして、それによって我々も死者を嚴重に恐れ、敬い、尊敬し大切にする。それは、ただ単に昔の思い出を大切にするのではなくて、彼らの伝えてくれた家柄・里山・着物も教えも尊敬するわけです。

読売新聞社から出した、やや有名になったキュプラー・ロス先生のシリーズの中で、私は一冊、日本語で書かせてもらったものがあります。それは『死ぬ瞬間のメッセージ』という本ですが、その元となった野堀拓路君が、ちょうど今頃、秋になった15歳のときに、中学校のスクールバスを降りた時に、反対車線を80キロも出して走っていた車に跳ね飛ばされました。余りにも強く路面に頭をぶつけたために、頭蓋骨から頭脳が半分出てしまうような、まず即死同然の状態でした。幾つかの病院に運ばれても即死です、駄目です、霊安室ですと言われるのです。ところが、彼の親はその地方の大物というか、非常に有名な、しかも熱心な仏教徒であってあきらめませんでした。何度もいろいろな病院をまわり、結局、筑波記念病院に至ったのですが、偉いとされる医師たちはみんな会議中で若い鮎沢先生という当時、29歳の新米の医師しか救急医療室にいなかった。鮎沢先生が、彼を引き受けて49日、まさに49日間、彼は意識不明で50日目に我に返ったのです。

呼吸器をつけているがためにしゃべれなかったのですが、「書きたい、書きたい」ということを示したので、鉛筆とノートを渡したら、もう何十ページにもわたり非常に鮮明に記憶を語り尽くしたのです。

そこへ私が呼ばれて、臨死体験などを勉強している私ですから、彼と合わせられ、もっと詳細に知るために画家に彼の見たことを書いてもらったのです。

例えば彼の体験の中で、このスライドは白黒で申し訳ないですが、本ではもっと美しい色になっています。彼は、いろいろな人生の場面を思い出したのですが、この一つひとつを通して、自分が人や自然とつながっていることを深く実感させられたというのです。おばあちゃんに抱かれているときや困ったとき、人の手を貸してもらったときや、お母ちゃんに初めて学校に連れて行かれたときや、鶯鳥などと遊んでいるときなどの場面です。みんなとつながり、一人で生きてきたわけではなく、みんなのお陰でここまで来たのだということを実感したそうです。

そしてその中で、彼が暗いトンネルを経て、例の如く花園に行ってしまうのですが、その花園でこの顔が現れるのです。このじいちゃんが、「お前は喜作か」と聞くのです。

ちなみに、野堀君のお父さまのお名前が喜作さまというのです。それに対して、野堀君が「いやっ」と拒んだら、このじいちゃんが「まさか、お前はあの噂の拓路君じゃあないやろな」と言った。拓路君が頭を下げて「はい」と言わんばかりのところへ、おじいちゃんは、「帰れ帰れ、拓路帰れ。あんたの居る場所と違うで」と追い返そうとするのです。でも、拓路君が冷たいトンネルや事故現場に戻りたくないから、花園の居心地が余りいいから隠れんぼみたいに、

あの木の裏、あの花の山の下で身を隠そうとしたのです。

またじいちゃんが、ドタドタやってきて、「拓路帰れ、拓路帰れ」とやってくるのです。その体験から拓路君がそのじいちゃんの方言、顔、口癖、背の高さ、手つき、手にはちょっといろいろあったのですが、全部覚えたのです。

拓路君が我に戻ったときにお母さまにこういう話をしていたら、お母さまが目丸くして、「それはあんたのおじいちゃんじゃなくて、わたしのおじいちゃんじゃないか」と。このおじいちゃんの古い白黒の写真を探し出して拓路君に見せたら、拓路君が「うん。あのじいや」というのです。

会ったことのない、見たことのない自分の曾お祖父ちゃんのことですが、ただし、「僕が会ったときに、眼鏡はかけとらんかった」と。もしかしたら、あの世でみんな1.5ぐらいの視力に戻るのでしょうか。どうして拓路君がその会ったことのないおじいちゃんに出会えたのか。単なる想像力で、そんな口癖、方言、背の高さ、体の形まで正しく想像し得るのか。

このような例が無数にあります。だが、今夜はそれを紹介しません。それを読みたければ他の私の出している本、立花隆が出している本などでは、幾らでも見つけられます。

言いたいのは「死んだら終わり」と、元より信じている日本人がほとんどいないはずばかりか、こういう類の先祖に出会った体験、あるいはあの世に行ってきた体験は何百ともなくこの日本に記録されている、残されているのです。

私が日本に来た理由の一つは、この死ぬ間際と、死んでから戻ってきたという話を勉強したければ、6～7世紀ぐらいからずっと文字を大事にしている、しかも死の現場を大事にしている文化を目指したらよいということでした。

インドも一時それを目指して大事にしたのですけれども、回教徒にヒンズー寺院がたくさん焼かれたり、いろいろな戦争に巻き込まれたりして残っていないし、また保存状態がよくないのに対して、日本では何と平安朝からつい明治期までたくさんのお寺々で、こういう臨終の記、往生伝などが残されているのです。

今昔を問わず、死んだら終わりではない。むしろ、我々が先祖とつながっており、それによって我々も子孫を大事にしなければ、家を大事にしなければ、国や領土を大事にしなければ、言うまでもなく、魂を大事にしなければと知っていたのです。「たましいのゆくえ」は、何も難しい話ではないのです。

この社会が何を大事にし、人を何によって評価しようとするのか。我々の健康を何によって支え、そして、その健康を支えるためにも伝統的な食生活、運動生活だけではなく、スキンシップやら、理解力やら、人間関係やらで、誇るべき側面をこの日本国は無数に持っているのです。満ち溢れているはずの文明です。

そして、話を死という極限までもっていくと、誇りに思えること、逆に恥ずかしく思うこと、大事にしたいもの、比較的はどうでもいいことなどが更に明

確に見えてくる感じがするのです。

二度とこういう話はこの場ではできないということもその一つです。この時間を共有していただきまして、こころよりお礼申し上げます。

司会：

どうも、ありがとうございました。

「日本に、僕は来たんですよ」というのが、今日こちらの南山にいらしたときの私への最初の言葉でしたが、その思いということ、それから私たちへの責任の開花といいますか、私たちにそれができる可能性というのを新たな希望として与えていただいた思いでおります。

ここで、質問の時間をとっていただいていますので、あと10分ほどですけれども、お急ぎの方もいらっしゃると思いますので、どなたかいかがでしょうか、ご遠慮なく。

はい。

フロアA：

私、先生のお話は2回目、拝聴させていただきまして非常に感激しております。

ベッカー：

おそれいました。

フロアA：

それで、私も非常に日本のことを研究しておりますのですが、先生はちょっとポイントが甘いかなという感じがしておるものですから。

ベッカー：

教えてください。

フロアA：

私自身は実は今、先生の先ほどご指摘のありました医療の側に立っております、愛知県医師会という団体に勤めておるものです。30兆円の一大巨大産業を構築したといえますか、国費を使っているわけです。

その原因がですね、国民が医療にかかるのと治してもらえるとという錯覚があるということです。それと同時に、経済・社会によって自己中心主義になりまして、自己責任主義は取らなくなってきていると。これが、現代の特徴だと。

それと、今日久しぶりに大学に来まして、これは南山大学のことを批判、京都大学の批判させていただきますが、大学が自己責任主義を取っていないと。なぜかといいますと、私の息子は海外に行っておりますけれども、大学というところは落第させるためにあると、はっきりと言っているのです。

ですから、大体5人にひとり、10人にひとりしか卒業できないということですから。結論としては、我々が自己責任主義を果たして取りうるのかどうかと、いうことを質問したいと思います。よろしくお願いします。

ベッカー：

ご指摘はごもっともで、もうなずくばかりでして、そしてその質問が、私が答えられるものではないと思うのです。それは、我々一人ひとりに対する課題として受け止めさせていただきます。ありがとうございました。

司会：

では次の方、いかがですか。

はい。

フロアB：

非常に素晴らしい話、ありがとうございました。

先生がそもそもこういうテーマを研究なさろうと思ったきっかけなどについてお話しただけなら嬉しいと思います。

ベッカー：

死ぬからです。

私が死ぬと分かっているからです。死ぬと分かったら、次はどのなのと思うでしょう。次はどのなのかと知りたければ、既に行ってきている人に話すしかないではないですか。ご理解いただけますかしら。

フロアB：

ありがとうございます。

ベッカー：

逆に、戦争を知らない時代のものではない。戦争は決していいものではない。ひどいものです。二度と起こってほしくないものです。

今アメリカについては、もう大変な恥としか思えないのです。あんな侵略戦争をやる、しかも自分の石油ために戦争をやるなどと、神がいるとすれば許せるものではないと思うのです。なぜならば、二度と戻ってこない命をたくさん奪って、二度と治らない傷をたくさん付けているからです。アメリカでは、私の年代の者がみんなそれを覚えている。よいことではないけれども、考えさせられます。

日本人は今、戦争映画を見ても戦争ゲームをビデオでやっても、命の二度となさは映画では感じられません。

つい先日、千葉県で発砲事件がありましたね。警察は幾ら正当防衛で、自己防衛で一発発砲したとしても、その後片づけが大変なのです。申立書やら説明書やら、本人も周囲も全部、一発だけでも大変なことなのです。ましてやもしその警察が、その犯人を殺してしまった場合に、もっと大変なのです。そして、仮にテレビで犯人が殺される場面があったとして、幾ら犯人といえども、たとえ「武蔵」に切られても、実はその人にも親も親しい人も子どもなどいたりして、その小社会に大きな穴が空くわけです。

テレビで死を見ていると、それは死ではないのです。

まず、人が倒れたり、いなくなったりする一瞬だけであって、周りに対して

どれくらいの悲しみや苦しみや傷が付くかは、全然描かれていないじゃないですか。そして、その殺した本人が幾ら正当防衛であっても、どんな悪夢を見るか描いていないです。

ベトナムから帰ってこない先輩もいるし、腕や目を失って帰ってきた知り合いもいるし、もうメダルばかりで、自分は元気はつらつでたくさんの敵を殺したという親戚もいるのです。いともいるのです。そのいとこの夢に、悪夢に出てくるのが自分の殺した場面だと言っているのです。

人を殺して悪夢でないなんていうのは、人間ではないと思います。だが、「暴れん坊！将軍」であろうと「武蔵」であろうと誰であろうと、警察版であろうと、「仮面ライダー」であろうと、人を殺しては、「仮面ライダー」の悪夢を描かないのは嘘です。人を殺しては、夢を見ずには済まない。

だから、この世代は死を知らないと思うのです、テレビだけになってしまっただけ。死を知っていたのでは、ほっとけない課題になると思うのです。

もう一つは、もともと私が、日本の病院で臨死体験談でも聞けると思っていましたらば、臨死体験云々を聞く以前に、この6人も10人もいる病室で見舞いもされずに、寝たきりのおばあちゃんたちが並べられている。これが日本的でもなければ、人間的でもない死に方ではないかと。日本がこれだけ死の伝統と家族の伝統があるところで、こんな大量生産の死に方されてたまるかと思ったのです。

日本が好きで比叡山の墓を獲得しているのに、そんなふうには死にたいと思えない。そうしたら、もう他人の問題ではなくなり、緊急課題でどうして日本的に死ねる場所を獲得できるかということが、個人としても制度としても大きな課題となってくるのです。

また、先ほど先生がおっしゃったとおり医療費も、もし私が運良く数十年先まで生きられるとしたらば、私の面倒みる医療費は残っていないはずですが、それも他人事ではないのです。

だから、個人としては任意保険などをそれなりに付けなければいけないばかりか、同時にこの制度を少しでも正さなければと思うわけです。

「死」から出発した課題が、そのうちに医療制度、今の死に方、そして最近環境問題をよく取り扱っているのも、先ほど申し上げたとおり、寝たきりになっている多くの人たちが駄目になっているのも環境のせいなのです。食生活と予防と、飲んでいる水であろうと、今吸っているただの、我々共同に吸っているダイオキシンであろうと。この環境のために我々は今、癌の種を蒔き、脳溢血の種を蒔き、心筋梗塞の種を蒔いているわけです。

そして、起こってしまってからでは遅いのですから、こころのケアとか、老人のケアとか、ターミナルケアとかと同時に、もっと健康維持、自己責任と呼んでも結構です、と環境保存を、因果応報的に、全体像に入れなければ、自分だけ守ろうと思っても無理です。そういうふうには課題が、小さな、個人に死なれ

て悔しい、傷がついたというところから、もっと死を誇りに思える文化を知りたいと転じ、そしてその立派な死に方、潔い死に方のできた文化をみているうちに、現在こういう問題が潜み、それに対してどう取り組むかというふうに転じていったわけです。

長くなって失礼しました。

司会：

はい。

では次の方、いかがですか。

ベッカー：

最近の若い人には目的がないとか、気力がないとか、「何がやりたいか分かんない」と批判されるし、また、そういう類の相談を持ち込む学生も院生も多々います、京大にも。

それで、彼らに対して私が次のようなアドバイスを申し述べます。則ち、「あなたには、今何か気になること、嫌なこと何かない?」。どんな人間でも、嫌なことはあるはずですよ。たとえば若い人だったら孤独感であったり、受験制度であったり、権力であったり、病気であったり、事故であったり。だったらば、その嫌なことを少しでも減らすように、あなたがどう働きかければできるかと問いかけます。

すぐその場で、「あっ、これぞ!」とひらめく人は時としてはいるのですが、大体「ふう〜ん」と言って、そして、次の週か数ヶ月後に、「先生、これはどう?」と来ます。私がそれを裁ける立場ではなくて、あなたがそれで行けるのならばそれで行け、と。大体うまくいくのです。本人の動機から湧き出ているものですから。

失礼しました。

司会：

他には、いかがでしょうか。

それでは、時間という何か時のメッセージがございまして、今回のこの「生と死」をテーマにしながら、「たましいのゆくえ」というお話をこれでお開きにしたいと思います。そして、一人ひとりの魂との出会いの場ということをごの場に示していただきましたので、一人ひとりの日本語の答えの中に、また「たましいのゆくえ」の何か答えが見いだせていくのではないかと、私は新しい位置づけをいただいた思いがしています。魂というのは学問、そして学問というのは生きる、そして死ぬ。そういう学問の位置づけを決して学校という建物の中だけではなく、みなさん一人ひとりの体、命の建物の中に完成していったらと思います。

では、今日はカール・ベッカー先生、本当にありがとうございました。